

漱石に学ぶもの

「坊ちゃん」と数題の漢詩から

後藤 亘

Watalu Gotō

まえがき

漱石には博士号を辞退したとか、大脳の重さが日本人としては並外れていたとかいう話が残っているが、それらの詮索はさておいて、注目すべきことは、単行本として出版され人口に膾炙した小説「坊ちゃん」「吾輩は猫である」「草枕」「こゝろ」「行人」「明暗」等々をはじめ龐大な著作が、漱石全集として幾セットも公刊され、今も老若男女、巾広い多数の読者を持ち続けていることだと思う。わたくしは、実は漱石全集のどのセットも読破していないにもかかわらず、おこがましくも本稿を書いたのは、偶々十数年前読んだ松岡譲著「漱石の漢詩」を思い返し、小説「坊ちゃん」の筋と作中の坊ちゃんを借りての漱石の心境が実によく表現されている七言律詩数題に出会って興味深く、改めて「坊ちゃん」をよみ返したので、両者を合せて所見の一つ二つを述べたいと思ったからである。なお、それに付随して漱石の教育観や教師論及び修善寺療養中の五言絶句を経て、漱石死の直前の七言律詩に至る漱石の悟道の過程をも紹介したかったからである。順を追ってのていねいな叙述とならず、論理の飛躍も目につくがそれらの点については、漱石についてじゅうぶんな知識をお持ちの読者各位の好意的な補充をお願いする次第である。小説「坊ちゃん」岩波文庫31-010-03の巻末小宮豊隆氏の解説によれば、この小説は約十日間に稿了している。即ち、明治39年3月17日付、滝田哲太郎氏宛並びに高浜清氏（後の虚子）あての書簡によると、3月17日既に17枚を書いており、3月27日には109枚を書きおわり、「もう山二つ三つ書けば千秋楽となる」と述べている。漱石の筆力、まことに驚嘆すべきものである。「坊ちゃん」は漱石の小説の中では比較的短い方で且つ読み易い。小説の舞台が中学校（旧制の中学校で生徒は男子のみ）であり、その中学校へ大学を卒業したばかりの数学担当の青年教師が赴任して、調子外れと思われる言動をするのが痛くに綴られているので、今でも中学生ともなれば、大部分が読んでいると思う。読み終って「あゝ面白かった」とすませる者もあろうし、小説の背景となった時代に漱石が言わんとしたものにいろいろな感想をもつ人も少くないと思う。わたくしも久し振りに「坊ちゃん」を読みかえし、漱石の「坊ちゃん」にまつわる漢詩なども読んだので、「坊ちゃん」及びその他についての感想を少し述べたいと思う。

（一） 漱石の教育観と教師観

漱石は大学を卒業して（明治28年）中学校教師として松山に赴任している。彼は求めに応じてその中学校の校友会誌（明治28年11月25日——岩波版全集第12巻所収）に愚見数則と題する論文を載せている。その要旨は「昔は書生は笈（きゆう）を負うてこの人と思う師を訪ね、師も亦弟子に対すること吾子に対する如くであったが、今や生徒達は学校を金を出して暫く逗留する宿屋のようにみているから、校長は宿屋の主人、教師達は宿屋の使用人のようになっている」と嘆きつゝ、而も自分自身が教育者として

は適していないしその資格もないが、糊口を求めて教職に就いているに過ぎないのであり、その上残念なことには、今の書生には自分のような似而非なる教育者もお茶を濁して教えることができるのであり、このことをも悲しむべきこととも云っているのである。そしてこの似而非なる教育者を追出す責任は国家にあるが、そればかりでなく、生徒に対しては、生徒として立派になって、このような似而非なる教師は到底この学校に留ることができないと悟らせるのが諸子の責任であると云い、自分の如き者が教育界から迫放されるときは、日本の教育は隆盛なりし時と思えと述べている。漱石自身をも含めて、当時の教育に対し、当時の教育者に対し、痛快極まる箴言というべきである。また、この論文の中で、軍艦や鉄道に金をかけながら教員養成や教員の待遇を安上りですませるような政策に批判を加える反面、現職の教師に対しては我は学問の教師なり、道徳は我が関する所に非ずと澄しておるべからずと注文している。最近の文部省調査によると小、中学校の20%をこえる学校が特設道徳の時間を有耶無耶にしていると報ぜられているが、若しそうだとすれば、わが国現代の教育界にも痛い忠告であると思う。

また「坊ちゃん」の中で着任早々校長室で校長とやりとりするところが面白くかゝられている。「校長は色の黒い狸のような男である。いやに勿体振っていた。まあ精出して勉強してくれ給えと云って恭々しく大きな印を捺した辞令を渡し——中略——追い追いつゆると話すという教育の精神についてお談義を聞かせた。おれは無論いゝ加減に聞いていたが、途中から、これは大変なところに来たと思った。おれみたいな無鉄砲な者をつかまえて、生徒の模範になれの、一校の師表と仰がれなくてはいかんの、学問以外に個人に徳化を及ぼさなくては教育者になれぬなどとむやみに法外な注文をする。そんな偉い人が月給四十円ではるばるこんな田舎に来るものか——後略——と云っている。この小説の中の校長とのやりとりを裏付ける事実がある。岩波文庫版「坊ちゃん」の巻末の小宮豊隆氏の解説末尾近くに次の様に書かれている。漱石は大学を卒業すると同時に某高等学校（旧制）と東京高等師範学校の両校から就職の口がかゝり、本人の不用意からどちらに行ってもいゝような返事をしたために事がもつれたが、人のすすめもあって東京高等師範学校にゆく気になって、当時の嘉納治五郎校長に会っている。その時、嘉納先生から教育者として学生の模範になれという意味のことを云われて、わたくしには勤まりそうもありませんと逡巡したら、嘉納先生は、いやそう正直に云われると益々あなたに来てもらいたいと云われたが結局この話は不成立に終わっている。漱石には他人から束縛を受けたり、道学先生的な型に入れられるのが嫌であったようである。

（二） 正 邪 善 悪 理 非 曲 直

坊ちゃんがよいよ松山に出発することになった時、幼い頃から特にめんどうをみてもらい、いつも坊ちゃんの味方になってくれていた清に行先を尋ねられ窮するところがある。清は古い型の気質は大変よい人であるが学問は余りない。坊ちゃんが行先は箱根の向うですか、此方ですかといった程度の質問をするので、赴任に至る間のいきさつを説明しても無駄だと思ったのであろうが、そればかりではなく、当時漱石の胸中には、大学卒業直後の就職にまつわるいざこざがあって、それらの嫌らしさから一刻も早く離れたかったことと、それに加えて、もっと根本的には、東京に生れて東京に育ったにもかゝらず、東京というところから得られる便益などを捨て、今までの自分とは一切かゝわりのない未知の土地、新しい世界にとびこんでゆきたいという気持が強くはたらいていたことと思われる。このあたりの漱石の気持が義理と人情とに絡まれた世から逃げ出したいという「草枕」冒頭の名文をおもい出させる。

そういう気持が他人に、ましてや清に、そう簡単には説明し難いからだしさもあり、心の隅には多少の迷いも残っていたに相違ないが決然として離京にふみ切ったのである。今日でも東京の人が四国松山市に転出してゆくとすれば、相当の勇気を要する。況んや交通の便の悪かった明治中期、漱石の時代では稀にみる異例のことであったと思う。それだけに漱石の大勇断を要したに相異なる。当時の漱石の心中を吐露した詩がいくつつかあるが、その中から二、三をあげてみたい。

- (I) 破碎空中百尺樓 空中、百尺の樓を破碎すれば
 巨濤却向月宮流 巨濤、却って月宮に向って流れん
 大魚無語没波底 大魚、語無く、波底に没し
 俊鶻將飛立岸頭 俊鶻(くまたか)將に飛ばんとして岸頭に立つ
 劍上風鳴殺氣多 劍上、風鳴って殺氣多く(平仄から云えば生殺氣がよろしきか)
 枕辺雨滴鎖閑愁 枕辺、雨滴(したゝ)て閑愁を鎖(とど)す
 一任文字買奇禍 一たび文字に任じて奇禍を買うてより
 笑指青山入予洲 笑って青山を指して、予洲(伊豫の国)に入らん

大意 一思いに胸中のモヤモヤした空中の樓閣を粉々に砕いてしまえば、大波は一度にどっと心の奥深く流れこんでくる。大魚は元来黙って波の底にひそんでいるもの、猛禽のくまたかが將にとびかゝろうとしている岸頭の姿を見るがよい。名刀に風が渡れば、殺氣が生じてくるが、といって静かに枕辺の雨滴を聞けば心淋しくもある。一度文字いじりなどしたばかりに、どうやら貧乏くじを引いたようなもの、仕方がない。こゝは時節到来を待って、人生到る処に青山ありとばかりに伊豫松山に赴任してゆこう。

都落ちを決心し、松山に赴く漱石の心境をよく表している。このような気持ちで赴任した松山であったが、其処での生活が必ずしも漱石の予期したようなものばかりではなく、其処での不満を時には酒に紛らせて、暫くの間は田舎の生活に甘んじている。

- (II) 快刀切断兩頭蛇 快刀、切断す、兩頭の蛇
 不顧人間笑語譚 顧みず人間(じんかん)笑語の譚(かまびすしき)を
 黄土千秋埋得失 黄土千秋、得失を埋め
 蒼天萬古照賢邪 蒼天萬古、賢邪を照らす
 微風易碎水中月 微風、碎き易し、水中の月
 片雨難留枝上花 片雨、留め難し、枝上の花
 大醉醒來寒徹骨 大醉醒め來って、寒、骨に徹す
 余生養得在山家 余生、養い得て、山家に在り

大意 世間は何とでも言わば言え、快刀をもって左せんか右せんかの心中煩悶葛藤の兩頭の蛇を切断した。人間死んで墓に入れば、失敗も成功も土になるだけだ。太陽は正邪賢愚を問わず昔から変りなく照している。水中の月影は微風にも崩れ易いし、枝上の花はとかく散り易いものである。はかない都会生活の夢から性根をとり戻し、余生をのんびり田舎の家で過すでしょうか。

世評の如何を一切気かけないで、大決心をして松山に来て、栄枯盛衰にとらわれないで、静かに余生を送ろうと努力してはいるものゝこの松山でもやはり気になることはあって、その邪惡非曲に対して性来の朴直な漱石の正義感が爆発していく。

○●○○●●◎ (Ⅲ) 孤負東風出故関	東風に孤負して（そむいて）故関（故郷の門）を出ず
●○○●●●◎ 鳥啼花謝幾時還	鳥啼き花謝して（花が次々落ちて交替する）幾時か還る
●●●●●●◎ 離愁似夢迢々淡	離愁夢に似て迢々（はるかなさま）として淡く
○●●●●●◎ 幽思與雲澹々間	幽思、雲と澹々として（うっすらとして）間なり
○●●●●●◎ 才子群中只守拙	才子群中、只拙を守り（平仄からは徒守拙がよろしきか）
●●●●●●◎ 小人圍裡独持頑	小人圍裡、独り頑を持す
○●●●●●◎ 寸心空托一杯酒	寸心空しく托す、一杯の酒
●●●●●●◎ 劍氣如霜照醉顔	劍氣、霜の如く醉顔を照らす

大意 春のそよ風にそむいて、東京をとび出したものゝさて春秋幾年を経たら帰られようぞ。別れの辛さも忘れかけた夢の如くはかなかったし、物思いといっても大空の白雲のようにのんびりしたものにすぎない。とにかく、今は小人才子の中で、しっかりと拙を守り、頑固を通すつもりである。ムシクムシすれば独酌で一杯きこしめすと腹にたまったものが、研ぎすました劍の如く、酔うた顔を照らしてせいぜいするものだ。

わずか一行七字、八行五十六字の律詩であるが、上記三題の詩は「坊ちゃん」の筋と漱石が「坊ちゃん」の中で言わんとするところを最も端的に示していると思う。漱石が松山に何年在住したかは、小説では不明であるが、僅か一年のようにも思える。漱石は一大決心で東京を出たけれども、心中では相なるべくは早く帰京したい気持もあったようである。先の詩の大意に述べたように、松山という土地の生活も、漱石の思っていたようなものばかりではなく、こゝでも生徒といふ、下宿の女中、主人といふ、学校の校長、教頭以下職員といふ、風呂屋に至るまで、小人あり才子ありで、坊ちゃんが常に正善是直の側に立って発言し行動しても、必ずしもそれが社会に容れられないばかりか、坊ちゃんは屢々小人才子に計られて馬鹿な目にあっている。その結果は坊ちゃんの愚直ともいふべきものに起因することになっていることが少なくない。小人才子どもの策のあることを知ってか知らずか、猪突猛進して結局は負けても溜飲を下げた時の坊ちゃんの胸中は、正に、「寸心空しく托す一杯の酒、劍氣霜の如く酔顔を照らす」というところによく表現されている。漱石はこうした坊ちゃんの些か肝癪がすぎるけれども、常に正善理直の側に立っての言動が多いので、小人才子の策に敗れることに憤を発するとともに、こうした小人才子をのさばらしておく社会に対しても怒を覚えているのである。先述の教育論のところでも述べた如く、似而非なる教員が、それでいて何とか勤まっていって教育界に対して怒を懐いていたのも全く同様なことと思う。

芸者と一緒に角屋に泊りこんだ赤シャツと野だの二人の現場を押えた坊ちゃんと山嵐とは、奸人二人の行手に立ちはだかると、問答無用とばかり二人をなぐり倒してしまう。そして「おれ達は逃げもかくれもせぬ。今夜五時までは浜の港屋にいる。用があるなら巡査なりなんでもよこせ」と啖呵を切って引揚げる。そしてかねて用意しておいた引揚荷物ともども、その夜の六時の汽船で二人は発つ。船が岸を離れれば離れるほどいゝ気持がした。神戸から東京までは直行で、新橋に着いた時はようやく娑婆に出たような気がしたと書いている。かつては大決断の下、見切りをつけて別れをつげた東京という娑婆にかえり着いてみて、坊ちゃんの心中には懐しさと空しさとが交錯したにちがいない。

以上で坊ちゃんについては一段落するのであるが、漱石はこの後熊本的高等学校に転じ、つづいて三年間の英国留学を命ぜられる。帰朝後官途を離れ、自由人として文筆を振り、新聞社に入って活躍する。こうした経歴の中で漱石の人間性は著しく幅を広げ、深さを増してゆくが、漱石の人的成長に最も大

きい影響を与えたのは、胃潰瘍により大内出血を起して修善寺温泉で生死の境を彷徨し、再び健康を恢復するまでの療養生活であった。この間に従来にも増して内省深思の人となった漱石は、死に至るまで道を求めてやまず、それを漢詩に残している。その二、三を紹介する前に「坊ちゃん」の結びとして、清について述べたいと思う。

(三) 清のこと

清のことを書くのは標題から些か離れるが、清が坊ちゃんの長所短所を知悉していて、しかも坊ちゃんを尊敬していたし、坊ちゃんも清のことを心から大切に思っていたから、坊ちゃんの時代を象徴する美しい主従の関係として少しだけふれてみたいと思う。

父はおれを可愛がってくれなかつたし、母は色が白くて女形になるのが好きだった兄にばかりひいきしていた。母が亡くなってから兄とけんかして父から勘当されるというところを、清が泣きながら父にあやまってくれて、坊ちゃんはやっと助けられたとかいている。坊ちゃんにいわせると、清は由緒ある者であったが、事情あって奉公することになったのである。その清がどうしたわけか、坊ちゃんを大切にしていなかった。「あなたはまっすぐでよい気質だ」とほめたし、坊ちゃんがお世辞は嫌いだというと「それだからいゝご気性です。」とうれしそうに坊ちゃんの顔を眺めたという。清は坊ちゃん宛の仮名ばかりの長い手紙の中で「むやみに他人にあだ名をつけてはならない」から始めて細々と世上の注意を与えながらその中で、「坊ちゃんは竹を割ったような気性だ」と喝破しながらも肝癪が強すぎて心配だと頂門の一針を下している。しかし坊ちゃんも清が兄にかくして菓子をくれたりすると、それは不公平だと子供ながらに抗議したりしている。坊ちゃんがいよいよ田舎にゆくことになると、清は大変失望し、どっちの見当ですか、箱根の向うか、此方かと尋ねて坊ちゃんを当惑させる。出発には荷造りを手伝ってくれた上、一緒に車で駅までくる。坊ちゃんの顔を見て、もうお別れかもしれませんね、ずいぶんごきげんよう和小さい声で言い、眼には一杯涙をためた。坊ちゃんは泣かなかったが、もうすこしで泣くところであったと告白している。汽車がよっぽど動き出してから、もう大丈夫だろうと思って窓から顔を出してふりかえってみると、清はやっぱり立っていた。何だか大変小さく見えた坊ちゃんは書いている。この辺の坊ちゃんと清との間に切っても切れぬ心の通う糸が一本ピンと張り続けられて来たようである。

松山に着いて落付くと、坊ちゃんは早速清に手紙をかく。その中に、清が笹飴を笹ごと食う夢を見たとかいている。清は心配しているだろう、難船して死にやしないかなどと思っただけなら、奮発して長い二百字足らずのをかいてやっている。清からはその後もう一度手紙が来ている。それまでに住んだ下宿を転々として坊ちゃんの手許に届けられている。わざわざ四日もかけて下書きをして仮名ばかりで四尺もある手紙で、先述の如く「坊ちゃんは竹を割ったような気性だが、肝癪がすぎるから心配だ」ということを言い添え、その上処世上の細々とした注意と共に、金拾円也を為替でお小遣いだと同封してきている。

清の心配していた肝癪が遂に爆発して松山を去った坊ちゃんは東京に着くといきなり清のところにとびこんでいく。清は嬉し涙をポタポタと流して喜ぶので、もう田舎には行かない、東京で家を持つと清を安心させている。坊ちゃんは、清とほんの短い間一軒の家に住むが、清はそこで死んでいく。清は死ぬ前に「後生だから坊ちゃんのお寺に埋めてくれ。お墓の中で坊ちゃんの来るのを待っている。」といっ

た。だから清のお墓は小日向の養源寺にある。というのが「坊ちゃん」の結びの文となっている。「坊ちゃん」の中で清はつけたりの味付けかもしれない。しかし「坊ちゃん」の中で出て来る人物の中で、清だけは他の人達と異って、終始一貫素直に澄みきった眼で坊ちゃんを眺め続けた老女である。清の些細な言動で「坊ちゃん」の筋を支え、漱石の言わんとしていることを立派に主張しているように思える。

（四）漢詩にみられるその後の漱石

漱石は、子規から俳句を学んでいるが、漢詩についても手ほどきを受け、ひきつづいて指導を受けている。二人の文通の中には屢々詩のやりとりがある。漱石はまた熊本時代に同僚長尾雨山あり、その朱批添作を得ているし、別に本田種竹からも指導を受けたといわれている。ともかく、漢詩の世界は、漱石にとっては小説とは全く別の世界であった。漱石の女婿、松岡譲氏によれば、漱石は気分転換に作詩したといわれている。いゝ歳をして、明け暮れ惚れたはれたというようなことばかり夢中にかいていると頭が俗化してしまう。そこで小説の進行中の筋からも人物の亡霊からもきれいさっぱりと解放されて、真人間に立ちかえって頭のねじをもとに戻しておく。そうして翌朝は新鮮な真人間の頭で精一杯小説に取り組むといったという。別言すれば、小説は漱石の本業であり、漢詩は彼の息抜きもの、道楽であったかもしれない。その余技道楽とも思われる漢詩の中に、かえって端的に漱石の本心が表現されたとも思われる。（二）に書いた七言律詩三題が「坊ちゃん」の筋と漱石の言わんとしていることをよく表わしているが如しである。しかし漱石が人間的な大成長を遂げたことを示すのは、修善寺療養中の作である。この間の作は「坊ちゃん」の頃とは比較にならぬ深思内省の人となったことを示し、それを五言絶句という漢詩としては極めて字数の少い形のものに絶妙な表現をしている。以下その中の二三を紹介したいと思う。

（Ⅰ）風流人未死 病裡領清閑 風流、人未だ死せず、病裡清閑を領す。
 日日山中事 朝朝見碧山 日々山中の事、朝々碧山を見る。

大意 風流とそれを友とする人とが、共に未だ死にはしない。（風流人でなくて、風流と人とを離して読むのが詩意に近いと思われる。）日日山中に病を養って清閑をほしいままにし、毎朝

毎朝山を眺めて飽くことがない。大自然の碧山と自分とが一体となっている。

（Ⅱ）仰臥人如唾 默然見大空 仰臥の人、唾の如し。默然として大空を見る。
 大空雲不動 終日杳相同 大空の雲は動かず、終日杳として相同じ。

大意 白い病床に臥している人は唾のように一言も発しない。只黙って大空を見ているだけである。

大空には雲が浮いていて、一日中はるか高くにあって動く様子もない。唾のように一言も発

せずに病床にある自分と、終日天高く浮いている雲の少しも動かないのとが一つになっている。

（Ⅲ）日似三春永 心隨野水空 日は三春の永きに似たり、心は野水に随って空し。
 牀頭花一片 閑落小眠中 牀頭花一片、閑（しずかに）落つ、小眠の中。

大意 毎日病床に寝ていると一日が春先のように長く思われる。また、心は野の水のゆくえもわからぬのを思って限りなく空しい。枕もとの花一片、うとうととしていた間に、いつの間にか音もなく散ってしまった。

第一詩は碧の山、第二詩は雲という自然と一体になった心情をうたっているし、第三の詩では一片の花のかそけくも散った音に託して、澄んだ心の無限の静けさをおもわせている。こうした心の遍歴を経

て、学者として、小説家として当代第一等の人となった漱石が、その没する前の遺偈（死後に残す最後の詩）ともいべき二題の七律に悟道と思われる表現をしている。

- (IV) 大愚難到志難成 大愚到り難く、志成り難し。
 五十春秋瞬息程 五十の春秋、瞬息の程。
 観道無言只入静 道を観じて言無く、只静に入る（平仄のルールからは徒入静か）
 拈詩有句独求清 詩を拈じて句有り、独り清を求む。
 迢迢天外去雲影 迢々たる天外、去雲の影、
 簌簌風中落葉声 簌々たる風中、落葉の声、
 忽見閑窓虚白上 忽ち見る閑窓、虚白の上を
 東山月出半江明 東山、月出でて半江明らかなり。

大意 愚に徹するつもりで努力して来たが、それもできず、志を立て、努めたが成就しないまゝ五十年間があつという間に過ぎてしまった。真理の道を極めんとして只黙々として静の世界に入り、詩を作つては独り句中に清高を求めている。天外はるかに去りゆく雲の影を眺め、風の音の中に聞こえてくる落葉の音に耳をかたむけている。ふと見れば窓のあたりがボーッと白くなりやがて月が東山に上がってくると江の片側が白く明るくなって来る。

- (V) 眞蹤寂寞杳難尋 眞蹤寂寞、杳として尋ね難く
 欲抱虚懷歩古今 虚懷を抱かんと欲して、古今を歩む。
 碧水碧山何在我 碧水碧山、何ぞ我に在らんや
 蓋天盖地是無心 蓋天盖地（あまねき天地）是れ無心
 依稀暮色月離草 依稀（ぼんやりした）暮色、月、草を離れ
 錯落秋声風在林 錯落（入り交っている）秋声、風、林に在り
 眼耳雙忘身亦失 眼耳雙（ふたつながら）忘れ、身も亦失す。
 空中独唱白雲吟 空中、独り唱す白雲の吟

大意 真理の道はまことに淋しくはるかにして容易には尋ね難いものである。自分は長い間己を空しうせんとして古今の書を読んで来た。ところがよくよく見ると、みるかぎりの碧の山水の何処に我というものがあろうか。天地自然すべて邪気もなく、我執もない無心の姿そのまゝではないか。もやにけむる夕まぐれ、月は無心のまゝ草を離れて上り、いろいろな音の交つた秋風の音が林の中にあるが、そこに我のはからは全くないのである。それと同様、自分の眼も耳も、否、すべて身に具わる感覚の世界から離れてしまつて天地と同化し、白雲の歌でも悠々とうたうとしようか。

漱石はこの詩を作つた翌々日に死の床につき、再び起つことはできなかつた。(IV) (V)の詩とも修善寺の病床の作、五言絶句と相通じつゝ、更に深められた漱石の無我となつて自然と同化しきつた心境であると思う。「坊ちゃん」の中でたぎり立つた朴直にして拙、愚直にして頑固であつたものが、かくも澄み切つた無我の美しさに浄化されている。こんな世界を、漱石は小説には書き得ないで、却つて彼の余技道楽とでもいべき漢詩の中にうたいあげたように思われるのである。晩年になつては、口をついて出たといわれる「則天無私」がいよいよ心の底にはっきりして来て、それがおのずから漢詩となつて生れたとも言えよう。

あ　と　が　き

本稿で漢詩五絶七律などの平仄韻等について解説するつもりは毛頭ないが、漢詩は日本人の作るものは漱石のものといえども日本人のもので、これを白文のまゝ中国音で棒読みするのではなく、日本文読みにかえて読むのであることだけは避け難いのである。白文の詩に日本文としての助詞、送り仮名などを附すのは、読む人がするので、人が異なれば読み方が異なり、随って詩意も多少は異なることがあり得る。できるだけ作者の意とするところをわかり易く読むのが上手な読み方というべきであろう。本稿では平仄韻に○・◎印を附し、よみ下し文を書き添えた上、大意もそれぞれ付しておいたが、これらは専ら松岡譲編著「漱石の漢詩、昭和41年9月30日朝日新聞社発行」に據ったものに多少わたくしの考えを加えたもので、不適切な点や誤りがあれば、一切はわたくしの責である。漱石は、「坊ちゃん」の中にこそ見当たらないが、例えば「草枕」や「虞美人草」等の中には所々に漢詩を入れて、それが燦然たる光彩を放っているように思われるが、本稿ではそれらには一切ふれないことにした。

漱石の教育論や教師観については、新日本新書290山住正己著「教育史に学ぶ」によった。また「坊ちゃん」の中で新任の朝、校長室で校長との間でやりとりしたことが、漱石と東京高等師範学校長嘉納先生との間に交わされた会話によっているらしいことと松山中学校で請われるまゝに書いたという教育論、教師観は、胸のすくような名論で、今も傾聴に値すると思ったので敢て付記した。両項とも山住正己氏の著と小宮豊隆氏の「坊ちゃん」解説の中から引用させていたゞいている。

漱石は「坊ちゃん」で中学校の教師を描いているが、特に教育的な意図をもったものとは思られない。またその後の詩の中でも、自省深思の努力をして求道につとめているが、固い一方の道学先生になるようなことはなかった。寧ろ教育については自ら師を求めて学ぶことをよしとしているし、自身も官途にあって束縛を受けることを嫌って自由人となり、広く古今の書を読んで自ら悟りの境地を拓いた人だと思ふ。

漱石は、学生時代から子規と親交があり、俳句も漢詩もその手ほどきを受けているし、また高浜虚子との交際も浅からぬものがある。漱石が俳句に打込んだ時期もあったので、漱石のその世界ものぞいてみたいが、遺憾ながらわたくしにはその力はなく、すべては後人の研究にまつ外はない。

参 考 文 献

- 岩波文庫　夏目漱石作　坊ちゃん
 新日夫新書290　山住正己著　教育史に学ぶ
 朝日新聞社　松岡譲編著　漱石の漢詩